

「瀬上のホタル」

2017年12月12日

横浜港南台教会に赴任して間もなく、瀬上市民の森にホタルが出ると聞いた。瀬上は車で10分足らずである。瀬上池の沢に添って行くと、田んぼに平家ホタルと、沢に源氏ホタルが乱舞していた。何十年ぶりでホタルを見て感激した。子どもの頃、農村に住んでいて、近くには田んぼに水を引く小川が流れていた。当時は、小川の岸はコンクリートではなく、石積みで水草も生え、ホタルの餌になるカワニナがいたので、ホタルが飛び交う美しい光景を毎年見る事ができた。ホタルには気の毒だったが、ホタルを取って、蚊帳の中に入れ、灯りを楽しむこともした。

久しぶりに見たホタルに感激し、子どもたちに見せたいと、毎年、子どもの教会に呼びかけ、リーダーのS・T兄がホタルの生態をスライドで説明し、大切に扱うように話した後、見に行った。子どもたちも美しいホタルの灯りを喜んだ。有志の人々がカワニナを生息させるために、地道な活動をしていると聞いた。

その頃から、この地域に住宅を建てるという話を聞いていた。最近、その話が進んだのであろうか、駅前で「瀬上のホタルを守れ」の署名活動がなされ、私も署名した。

12月11日の週刊誌『アエラ』に「ホタルの自生地宅地開発」と題して、「横浜市栄区にある市内最大のホタルの自生地。その開発の是非を問う住民投票条例の制定を目指し、市民グループが署名活動を行っている」という記事を掲載していた。

ホタルが自生している瀬上沢周辺は、東京ドームの約6.5個分に当たる30ヘクタールの緑地である。ここに、東急建設が、宅地、商業施設建設計画を、横浜市に提案している。横浜市は提案を評価し、実現に向けて手続きを進めている。これに対し、市民有志は「横浜のみどりを未来につなぐ実行委員会（以下 - 委員会）」を立ち上げ、開発の是非を問う住民投票条例の制定を目指し、署名活動を展開している。

横浜市は空き家が年々増加し、人口は2019年をピークに減少していく。委員会は、宅地を増やさないと国が「国土利用計画」に反し、貴重な緑地を破壊してまで、宅地を増やす必要はないと主張している。これに対し、横浜市都市整備局は、若い人に住んでもらえる魅力ある都市づくりのために良質な住宅地を供給する必要がある、国の方針とも矛盾しないと反論している。

規制が厳しい市街化調整区域を緩やかな市街化区分に変更することが可能になった。区域区分を変更する権限は都道府県にあったが、政令指定都市に移譲された。横浜市は譲渡を受け、宅地開発を認めようとしている訳である。しかし、自治体が民間開発のために市街化区域を増やすことは異例のことで、これが前例となれば、緑地喪失が全国に広がっていくだろう。東急建設は、「300戸の住宅と商業施設を建設するが、区域の7割を特別緑化保全地区や公園にし、横浜市に移管する。湿地にいるホタルは開発前に保護し、新たに湿地を作り、生息地を保全する」と言っている。委員会は、「50年後、ニュータウンが残ると里山の風景が残ると、どちらが本当の財産になるのか」と問いかけている。

雑誌の論調は公平を期して書いてあるが、近くに住む者としては、開発に反対である。住宅と商業施設ができれば、自然破壊は避けられない。また最近、駅から近い住宅が好まれている。開発予定地区は駅からも遠く、人口減少の中、住居を求める人も少ないのではない。港南台は緑が多く、円海山の木々が空気を清々しくしてくれている。この財産は、後々の人々のために、何としても守りたいものである。